

南海トラフ巨大地震に備えて



令和6年度中学生体験学習事業で岩手県釜石市・大船渡市・陸前高田市及び宮城県南三陸町・石巻市を訪れました。東日本大震災から13年が経過した今なお、復興が進められています。

地震のあとの津波により多くの命や建物が奪われ、現在も行方不明者がいるというお話を聞き、自然災害の恐ろしさを再認識させられました。

大阪でも将来想定されている南海トラフ巨大地震が発生した場合には、約2時間後に3mの津波が来ると想定されていますので、災害ごとの避難場所を再確認しておきましょう。

【頑丈な高い建物へ避難】

津波警報、大津波警報が発令された場合に、速やかにマンション等の高い建物の3階以上に避難してください。また、事前に避難できる場所を確認しておきましょう。



福島区
避難所一覧の
ホームページ

【在宅避難のすすめ】

地震や津波等の大規模災害が発生した場合でも、自宅での避難が可能な方はできるだけ在宅避難をお願いします。飲料水や食料、トイレ用品など1週間程度の備蓄をしていただき、消費期限が近づいてきたものから消費し買い足すという「ローリングストック」を心掛けましょう。



中学生体験学習事業に参加した生徒の皆さんに、感想文を書いてもらっています。当リーフレットでは、今回の事業の代表を務めていただいた生徒の感想文を紹介しますが、福島区役所のホームページでは、全員の感想文を公開していますので、ぜひお読みください。

僕はこれからもっと災害について深く考え、ただ怖さだけを感じるのではなく、どうしたらよりたくさんの方が助かるかを考えることが大切だとこの3日間を通して思い、周りの人にも伝えるべきだと考えました。



中学生の感想文を
掲載している
ホームページ

僕はこの3日間、話を聞き、考えなければならぬと思うことが一つありました。それは、避難について話し合って決めることです。まず、様々な状況を想定し、避難訓練を行い、どのような状況になっても臨機応変に対応できるようにすることが大事だと思います。また、避難経路や集合場所を家族や学校で決めることが大切だと感じました。大川小学校は避難経路を決めていなかったために長時間グラウンドで待たされてしまい、津波がすぐ近くに來てから避難を開始したので、ほとんどの人が亡くなってしまいました。一方で、釜石東中学校は避難経路を決めていたので、地震の揺れが収まってすぐに避難し、ほとんどの人が助かりました。なので、僕も避難経路を確認しようと思いました。

僕が特に感じたことは、当たり前にあるもの、人、光景は偉く大切なものであるということです。大川小学校で見たものの中に、朝は話せた自分の子どもがもう二度と会えなくなってしまうことがあるということが書かれていました。僕はその文を見てとても寂しく、つらい気持ちになりました。そして、校舎のほとんどが津波によって破壊されたこと、また、米沢さんのお話で周りの住宅街が全て更地になったと聞き、津波の強さ、恐ろしさを改めて感じました。

野田中学校 3年生 永友 海晴

「中学生体験学習事業」にご協力いただいた皆さま

皆さまから温かいご支援をいただき、心よりお礼申し上げます。

【ご寄附いただいた皆さま（今回の氏名等掲載につきまして、令和6年8月末までに、個人で1万円、法人で3万円以上当事業にご寄附いただいた方のうち、氏名の公表をご了承いただいた方のみ掲載しております）】

〈法人〉京阪神ナショナル商事株式会社 様 光洋電機工業株式会社 様
〈個人〉林 靖浩 様 山本 雅子 様 猫島 義明 様

【参加生徒の現地食事代にご協力いただいた皆さま】

福島区地域振興会 八阪中学校PTA 下福島中学校PTA 野田中学校PTA

引き続き、被災地を訪問し防災やSDGsについて学ぶ「中学生体験学習事業」への寄附を募集しています。区内の中学生が自主性やまちづくり、SDGsなどへの関心を一層高められるような事業を実施する予定ですので、ご協力をお願いします。詳しくは福島区役所にお問い合わせいただくか、福島区役所ホームページをご覧ください。



寄付募集の
ホームページ

令和6年度

大阪市福島区

中学生体験学習事業のご報告

奇跡の一本松



行き先 岩手県 宮城県



令和6年7月29日から31日までの3日間、福島区内3中学校の生徒代表8名が、東日本大震災の被災地である岩手県及び宮城県を訪問し体験学習を行いました。

参加した生徒たちが現地で直接見聞した被災地の状況、被災者のお話、SDGsの取組など、そこで得た経験をこのリーフレットでお伝えします。

参加中学生氏名(中学校ごとに50音順)

【八阪中学校】阪本 仁香(2年)・佐藤 夏帆(3年)・島田 和奏(3年)
【下福島中学校】アンドレイ(3年)・黒澤 りん(2年)・西田 明日葉(2年)
【野田中学校】伊藤 ゆうみ(3年)・永友 海晴(3年)

- 1日目
 - 8時40分 出発式(福島区役所)
 - 14時15分 いわて花巻空港到着
 - 15時45分 いのちをつなぐ未来館見学
 - 17時00分 魚河岸テラスでSDGsプログラム～ウニから学ぶ海洋環境学習～
 - 20時15分 振り返り学習
 - 20時50分 1日目のプログラム終了

- 2日目
 - 8時50分 震災遺構「米沢商会ビル」見学
 - 10時35分 キャッセン大船渡～防災体験プログラム～
 - 13時45分 高田松原津波復興祈念公園見学(献花)
 - 15時00分 東日本大震災津波伝承館見学
 - 19時30分 特別講話、振り返り学習
 - 20時05分 2日目のプログラム終了

- 3日目
 - 8時45分 震災遺構「大川小学校」見学
 - 10時30分 石ノ森萬画館、いしのまき元気いしばい見学
 - 17時10分 伊丹空港到着
 - 18時20分 帰阪式(福島区役所)

中学生体験学習事業の様子は
福島区役所ホームページにも
掲載しています。ご覧ください



【いのちをつなぐ未来館（うのすまい・トモス）】

被災当時中学生だったガイドの方から、震災の教訓や体験談などを聞いた。

～鵜住居地区防災センターから得る教訓～

このセンターは、災害時の「避難所」であったが津波の「避難場所」ではなかった。

しかし、津波の避難訓練では、住民が参加しやすいように高台ではなく平地にあるこのセンターを津波の「避難場所」として利用していた。「防災センター」という名称に加え、この誤解を招く訓練の運用が、地震が来たら防災センターに逃げるといった意識を住民に定着させた。そしてあの日、避難した住民 196 名のうち 162 名もの方がこの場所で亡くなった。

💡「**避難場所**」(切迫した災害の危険から逃れるための場所)と「**避難所**」(一定期間滞在し避難者の生活環境を確保するための施設)は**違う**ことを知る
💡**本当に安全な場所なのか自分で考える**

～釜石の奇跡～

釜石東中学校の生徒たちは揺れが収まると自主的に校庭に飛び出し整列、すぐに先生の指示で訓練で決められていた高台にある場所に向かって走り出した。その後もさらに高台を目指し避難先を変え移動し、生徒全員無事に避難することができた。また、移動時には、津波が迫る極限状態の中でも小学生の手を引いたり居合わせた園児をおぶったりする中学生も多かった。

💡**迅速な判断・行動ができたのは、地域の人たちと街歩きしながらのハザードマップ作成や津波の疑似体験等、様々な想定を取り入れた体験型の避難訓練の成果**

<生徒の声>

実際に地震の後の大きな津波から避難したことは今までの人生で一度もないが、いつ来るかわからない南海トラフが来た時に冷静な判断ができるようにするには、正しい知識を身につけ、他の人との連携も大切だと思った。

【SDG s プログラム～ウニから学ぶ海洋環境学習～(魚河岸テラス)】

三陸沿岸地域の海では、海水温の上昇やウニが海藻を食べ尽くしてしまうことなどにより磯焼け（海の砂漠化）が深刻化。また、ウニ自身もやせて商品価値のないものに。釜石では、磯焼け対策とウニの新たな価値を作り出すため、ワカメの加工で出る端材をエサに、2022 年からやせウニの畜養を開始。価値のないものに価値を付加し、苦境をチャンスに変える持続可能な海洋保全への取組みを行っている。

実際に畜養ウニの殻剥きと試食を体験し、地域特産品としての新たな可能性を存分に感じた。



<生徒の声>

ウニの漁獲量が減っている。海洋環境を整え、資源を循環させる大切さを学んだ。

【震災遺構 米沢商会ビル】

このビルで被災した米沢さんからお話を聞いた。

直前まで一緒にいた米沢さんの両親と弟は、避難所に指定されていた近くの市民会館に避難したが、津波に飲み込まれ亡くなった。何かあればすぐに市民会館に行けるからとビルに残った米沢さんは 2 階の窓から津波を確認、そのまま 3 階へ。すでに 2 階建ての家の屋根が見えなくなりそうな津波の勢いに慌てて屋上に逃れ、無我夢中

で煙突部のはしごを登った。高さ 15m もの津波が足元に迫る中、必死に手すりしがみつki難を逃れた。

💡**市民会館が安全安心という思い込みがあった。避難先が本当に安全な場所なのか考えること必要。**

<生徒の声>

与えられる指示を待つだけでなく、1 人 1 人が防災に日常から意識を持つことが自身の命を守ることににつながる。自身で考えて行動することの大切さを学んだ。



【防災観光アドベンチャーゲーム（キャッセン大船渡）】

キャッセン大船渡エリアの各所に設置された QR ボックスをスマホで読み込み、「いきる知恵」もしくは「わかれ道」を聞きながらゴールの指定緊急避難場所「加茂神社」を目指す防災体験プログラムで震災を追体験した。

東日本大震災では発災から約 3 分後に大津波警報が出され、27 分後に大津波が到達した。

・避難行動の猶予はあまりにも短い。土地勘あればすぐに避難できるが、なければ迷う。

💡**すぐに避難開始する**
💡**あらかじめ指定緊急避難場所を調べておく**

・究極の判断の連続になる

💡**その時に最適解を導き出せるよう日頃から備えておく**

・わかれ道の回答に正解はない

💡**実際の災害時に取るべき行動は一つではない**



【高田松原津波復興祈念公園】

復興の象徴であるこの公園で献花を行い、ガイドの方の案内のもと、震災遺構である旧道の駅「タピック 45」や「奇跡の一本松」などパーク内を見学した。

「タピック 45」は強固な建物で、建物裏側（海側）が階段と観客席で構成されており、いざという時に建物上部まで上がれるようになっていた。実際にこの建物に避難した人は津波の難を逃れた。

建物本体に大きな損傷はなかったが、内部の壁、天井、床などは破壊され、津波の圧倒的な威力を物語っている。

「奇跡の一本松」は、海側に建つユースホステルのお陰で津波が二手に分かれ、直撃を免れたために津波に耐え残ったとも言われ、二つ併せて希望の象徴とされている。

<生徒の声>

津波の被害を受けた建物内部に、木など元々そこにあるはずのないものが散乱していた。いろんなものを飲み込む津波の威力を感じ、南海トラフも同じことになると思うと怖くなった。

【東日本大震災津波伝承館】

津波・地震の脅威を伝える映像や、様々な展示資料を通じて自然災害について学んだ。



<生徒の声>

津波の恐ろしさ。これが私の心の中に強く残った。

”津波でんでんこ”。三陸地方の「**津波が来たら各自ばらばらで高台に逃げろ**」という意味を持つ教えを大切にして、この伝承館で学んだことを家族や学校の人たちに伝えていき、今日明日来てもおかしくない南海トラフ巨大地震に繋げていきたい。

【特別講話：東日本大震災について】

「南三陸ホテル観洋」の副支配人の昆野さんにお話しいただいた。

このホテルは、自らも被災しながらも復興の拠点となり、ホテルの施設を二次避難所として 600 人以上の被災者を受け入れるなど、様々な角度から被災者の支援に尽力された。人々の気づきや防災意識向上のために、現在も実体験を伝える「語り部バス」の運行が続けている。「みなさんの学校も避難所に指定されていると思う。そこに避難するみなさんは被災者でもあるが、ぜひ手助けできる人間になってほしい。」とのメッセージをいただいた。



<生徒の声>

恐ろしかった体験など、私たちにいろんなことを教えてくれたことで、改めて津波の怖さを実感し、備えをしていこうと思った。

【震災遺構 大川小学校】

この学校で娘さんを亡くされた佐藤さんから、全校児童の約 7 割にあたる 74 名もの子どもたちが犠牲になったお話を聞いた。

あの日、すぐに高台に向かうという適切な避難指示を出さずに先生は子どもたちを校庭に整列、待機させた。避難を開始したのは津波が来る 1 分前。登り慣れた学校の裏山ではなく橋のたもとに向かって。津波に向かって逃げた先は行き止まりだった。

💡**避難した学校の多くは、あの日、話し合いはしていない。どうすべきが決まっていたから。パニックになる前に逃げた。**
💡**訓練は、本気になれる、本番一発勝負と思えるものである必要**
💡**訓練もハザードマップも研究結果も、すべてそれらを行動に結びつけられるかどうか**
💡**死にたくない、死なせたくないという思いが防災意識の本質**

<生徒の声>

「“あの日”にふたをせず向き合うこと、目を背けずに考え続けることが（大川小の校歌のタイトルでもある）“未来を拓く”ということ」という佐藤さんの言葉が印象に残った。



【石ノ森萬画館、いしのまき元気いちば】

震災の約 2 年後に完全再開した石巻の復興のシンボル「石ノ森萬画館」を見学した後、「いしのまき元気いちば」で株式会社元気いしのまき副社長の松本さんから復興のお話を聞いた。



「震災後、水産加工会社の社長たちと復興に向けて会社を立ち上げ、「いしのまき元気いちば」を作り、自分たちの商品を置いて PR した。メディアにも取り上げられるようになった。まだまだ前途多難だが、協力し合い活性化中。みなさんも何かあったらここを思い出し、何とかなると、前を向いてやっていってほしい。」

<生徒の声>

石巻の新たな可能性を切り開くという強い思いや、復興のために多くの人が努力してきたことを広く伝えたいと思った。